

エネルギーの森、熱のみち、歩くまち

雲間からのぞく日差しを浴びる喜びや、滴の水しぶきの神々しいまでの気持ちよさを、身体は本能的に知っている。それは決して太陽と水だけの仕事ではなく、周囲の環境の総体が、自然の恵みにあふれているからである。

人間と自然是太古より、そうした喜びにあふれた熱やエネルギーのやりとりをしてきた。

この革命的な機械は、自然な近さにあってほしいし、自然な大きさをしてほしい、自然な色で、自然なかたちで、自然な感触で、自然なシステムで、自然なふるまいをしてほしいと願う。

それらをもし実現できたのなら、光熱費とか熱効率のみでは判断できないような豊かな価値観を育み、太陽と風と風、大切な人たちに囲まれて幸せに暮らす、そんなまちをつくるのではないだろうか。

そのような願いをこめ、以下の4点を提案の骨子とする。

- ① 徒歩圏内のコンパクトなまち／徒歩圏外の森
- ② まちで熱を／森でエネルギーを創る
- ③ 道をエネルギー源とする
- ④ 热のみち／外に出たくなるまち

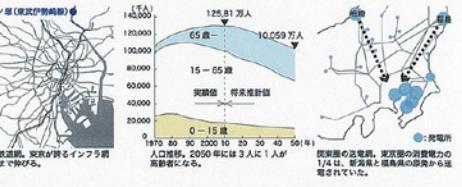


2030年の東京大都市圏の郊外を考える

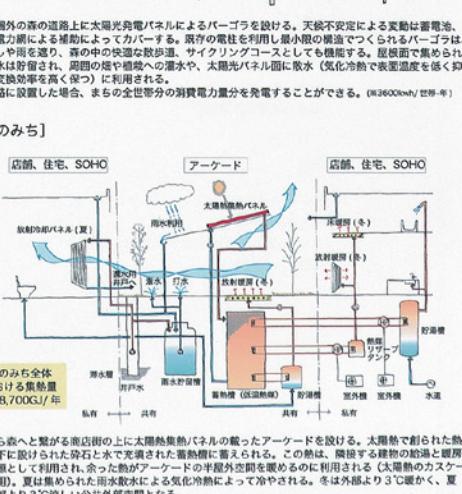
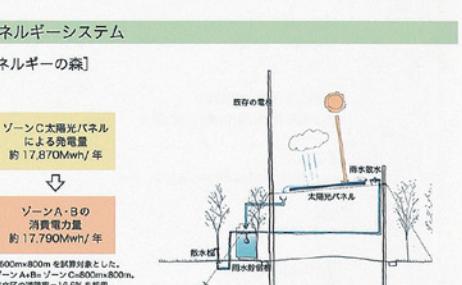
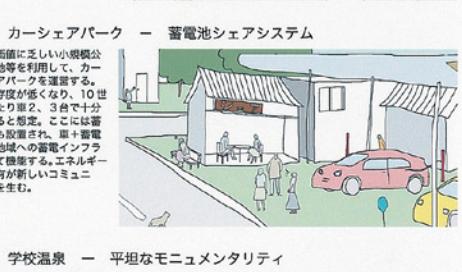
① 駅から徒歩圏内のコンパクトなまち／徒歩圏外の森
東京郊外へのプロローグ化は、今までとは人口減少・高齢化的進行によるものも変化し続ける。鉄道等のインフラ維持は経営的に難しく、車を運転しない高齢者にとって生活しやすい街は、孤独死の増加にもつながりうる。そこで、駅から徒歩圏内を縮小して、車を運転しない高齢者にとって生活しやすい街は、孤独死の増加とともにつながりうる。そこで、駅から徒歩圏内を縮小して、車を運転しない高齢者にとって生活しやすい街は、孤独死の増加とともにつながりうる。

② まちで熱を／森でエネルギーを創る
東日本大震災は、東京都都市圏の消費電力が福島へ大きく依存し、自立性が低いことを見つけた。そこで、①歩歩圏外にあるまちにおいて、搬送コストが小さい太陽発電システムを採用して電力をつくる。②歩歩圏内にあるまちにおいて、搬送コストが大きいが効率の高い地熱利用システムを採用して電力をつくる。森は継続性に連続するため、廻り合うまち同士で融通可能であり、都心への電力供給も可能である。

③ 道をエネルギー源とする
④ 热のみち・外に出たくなるまち
市街地における道でつくられる(冷・温)熱を建物内部だけでなく外部にも利用し、快適な外部空間「熱のみち」をつくる。住民がぐるりにその道にたどり着けるように配置することで、若者男女問わらず、健脚的に外に出たくなるまちを目指す。



敷地は、東京駅東伊勢崎線竹ノ塚駅から東に約3haを設定する。東社会、スマート化、情報化を進め、少子高齢化社会にふさわしい施設や、エネルギーを有効活用するための設備を整備する。



まちのマスター・プラン実施プロセス

